HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における近代建築の展開
Author(s)	越野, 武; 角, 幸博
Citation	北海道大學工學部研究報告, 92, 93-104
Issue Date	1979-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/41540
Type	departmental bulletin paper
File Information	92_93-104.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学工学部研究報告
第92号（昭和54年）

Bulletin of the Faculty of Engineering,
Hokkaido University, No. 92 (1979)

北海道における近代建築の展開

越野　武　　角　幸博

（昭和53年7月10日受理）

A Few Phases of Modern Architecture in Hokkaido

Takeshi Koshino, Yukihiro Kado

(Received July 10, 1978)

Abstract

1. Developement of Early Westernized Architecture

Hokkaido, that has been colonized since the late nineteenth century, serves as an important example to survey the trends of the early westernization of architecture at the time in Japan. The earliest momenta were the introduction of the western architecture into Hakodate, one of the ports newly opened in 1859, and the buildings executed by the Colonial Department chiefly around Sapporo since 1872. The latter achieved a particularly plain type of architecture, that defined in turn the characters of later buildings in Sapporo. While, in Hakodate they kept the stylistic coherence until 1910s. In Otaru, there are observed characteristic buildings of the timber-masonry construction, that stemmed from the substitution for the traditional plastered warehouses, and developed under the influence of the western building types. Among the fishermen's houses near Iwanai, a rudimentary westernization appeared as early as in 1870s.

2. Modern Architecture in the Taisho and the Early Showa Periods

This phase of architecture remains least studied, although it was particularly important, for, at the time, early professional architects began to work in Sapporo. Among them was Max Hinder(1887-1963), an architect born in Zurich, who executed several fascinating modes of architecture including two missionary schools and more than five abodes.

1．初期洋風建築の展開

1—1　緒　　言

わが国における初期洋風建築には，ふたつの系譜が認められるという。ひとつは維新前，幕府および諸雄藩の興した産業・軍事建築に端を発し，明治新政府の官僚建築技術者に受継がれた洋風建築であり，他は，開港場における民間の洋風建築の系譜とされている。前者には，洋風建築を技術として把える傾向—従って見隠れの小屋組を洋風トラスとする—が指摘され，後者には技術よりも外見の，かたちの洋風直写—従って和小屋を遺存する—が傾向として指摘されている〔**論文リストV—1**．以下同〕[1]。前者は，工部省営繕寮（局），特に林忠恕（1835～1893）の作品によって代表されるが，北海道における開拓使本庁営繕組織，およびその技師安達喜幸（1827～1884）の作品に，共通の性格を見出すことができる。つまり，開拓使の洋風建築は，工部省建

建築工学科　建築計画学第2講座

築の系譜をひくものとして，また工部省の建築の多くが既に失われているのに対し，開拓使の建築には，なお遺構および関連資料の比較的豊富なことによって注目され研究されてきたのである。

もっとも，同じ開拓使の中で支庁，特に函館支庁の建築には，札幌本庁と異なる独特の性格を少なからず認めることができる。それは，むしろ開港場の民間洋風建築に根ざし，その特質を受けて，明治中後期へと展開していくように思われるのである。

ところで，よく知られているように，上記工部省の林忠恕は，開港場横浜において大工としての修業を積み，後，官に奉職した技術者である。また安達喜幸は江戸町大工から転じて，明治4年開拓使に奉じた。[2]両者は，官に入るまでの履歴がほとんど伝わらないこと，「雇」「御用掛」という正規外の吏員として，しかも比較的高給で登用されていること，それを裏づけるように実質的な主任技師としての実力が伝承されていること，で著しく類似している。新しい洋風建築を受入れ消化する上で，旧来の官僚技術者とは異なった，柔軟な能力が彼らに求められたのであろう。両者の作品に指摘される技術主義的な傾向，洋風建築に対する比較的直截で深い理解は，個人的作風は別として，御雇外国人技術者の指導，および舶載された建築資料に直接触れる機会の多かったことによるであろうし，さらに，旧幕臣出身の上席技術者による基本的方向づけも考えられるところである。この差は小さなものではなかったが，にもかかわらず，彼らもまた大工棟梁としての修業を基にした建築家という点で，清水喜助（1815～1881），立石清重（1829～1894），高橋兼吉（1845～1894）ら，民間にあって洋風建築を推進した棟梁建築家と変るわけではない。初期洋風建築は，これら大工棟梁の伝統的技能，資質に担われて発展し，独自の性格をあらわしたのである。ふたつの系譜は必ずしも峻別されるものではなく，初期洋風建築のさまざまな側面を代表するものとして，正当に理解されるものであろう。特に，初期洋風建築の伝播，変貌，定着の過程を眺めようとする時，この観点が重要になるように思われるのである。

いずれにせよ，初期洋風建築の研究は，幕末，明治初期の局面に限ることなく，その展開，定着の歴史過程と，それにともなう様態の諸相を，あわせて明らかにすることが必要である。以下筆者らの調査研究を要約しながら，札幌，函館，小樽の3都市，および日本海沿岸地方のそれぞれに，初期洋風建築の展開を追ってみたい。

1—2 開拓使洋風建築の性格

開拓使の建築については，既に遠藤明久によって実証的研究が積まれており，[2]この点に関して特に加えることはない。ここでは，北海道における洋風建築の出発点のひとつとして，その性格を2，3考察しておきたい。

開拓使は，いうまでもなく明治2年（1869）に設けられ，同15年（1882）まで存続して，盛んな建設事業を興した。その間，明治5年，開府されたばかりの道都札幌を主舞台として建設活動が本格化するとともに，洋風建築を導入している。その洋風建築は，概そ明治10年を境に，前後では様式的特徴を異にしていることが観察され，その転換には，札幌農学校に招請されたアメリカ人教師の指導，影響の関わったであろうことが指摘されている。[3]

前期は，明治7，8年に大幅な建設活動の停滞がはさまるから，実質的には明治5年に着手され，翌6年中に竣工した諸建築と考えてよく，その代表作は，いうまでもなく開拓使本庁舎である。本庁舎の設計は，遠藤の研究によって，従来言われてきた外人顧問によるのではなく，彼らのもたらしたであろうモデル，資料に基づきながら，開拓使の邦人技術者が行なったと推考されている。[2]設計行為の把え方にもよるが，この建築の特質を決定している中央八角塔屋の過大なプロポーションは，邦人技術者の手を推察させるものであった。とすれば，この時点での日本人の手になる洋風建築としては，相当に高い水準を達成していたとしなくてはならない。同時期の

工部省による一連の官衙建築に比肩し，また，例えば清水喜助の洋風建築とは対蹠的な，洋風モデルへの直截な理解をあらわしている［著書—18］。

明治5，6年の建築中，この本庁舎はいはば別格の大作であったが，他の一連の群小官衙，官舎建築を概観してみると，そこに特有の試行，実験の意図を読みとることができる。外人顧問宿舎のひとつ，洋造弐邸と，邦人吏員宿舎本庁分局には，それぞれ対比的な様式，前者では古典主義的なジョージアン小住宅を，後者では，ピクチュアレスクな田園小住宅をモデルとして，忠実な再現を試みている。もうひとつの外人宿舎，洋造壱邸の平面計画では，意図的な折衷が試みられている。全体に緩やかな平面であるが，左右対称に整えられ，大壁で囲われた洋風独立室が，開放的な椽側風のヴェランダで連結されている。同様のヴェランダは他の吏員官舎にも見られる。この期の官舎平面は，当時の日本人の住居としてはかなり大胆な，洋風独立室を配するものであった。後期の官舎では，外観を洋風としながら，内部は和室につくるようになるから，現実の生活感覚にはそぐはないものとして反省されたのであろう。

後期の開拓使建築は，洋造ホテル豊平館（明治13年．重要文化財）に代表される。

この期のものには，前期の，寄棟屋根四周に簡素な水平繰形の蛇腹を廻す古典的様式よりは，大きく切妻を表わす軽快な様式が目立っている。豊平館では，両翼切妻面をペディメント風に整えており，これは以降の比較的大規模な建築にしばしば用いられるようになる。[3]もっとも，このような主要意匠要素は，建物の規模や格式，種別に左右されることであって，前後期の差異をより端的に示すのは，むしろ細部意匠の変化である。最も明快な指標は開口形式および開口の額縁意匠であろう。窓の開口形式では，明治6年竣工の洋造弐邸，吏員官舎，洋造町長屋に見られた鎧戸付内開窓は，このあとほぼ完全に姿を消し，上下げ窓のみが用いられるようになる。窓額縁では，前期に普通であった三角，または楕形ペディメントが，明治10年の開拓使工業局庁舎を最後に使われなくなる。豊平館のように，玄関ポーチなどを古典的に意匠した建築でさえ，窓上には簡素な水平笠木のみを飾っており，それがこの建物外観の平明な印象を決定している。

額縁の納り，抱と窓台の接合形式は，両部材を同断面でトメに継ぎ廻すのが，前期では基本手法であった。これは明治13年の藻岩学校まで認められるが，次第に縦横両部材を交叉させる形式に変わる。また軒廻りの装飾についても，初期の水平繰形蛇腹は次第に棄てられ，破風飾（Barge Board）も簡略化されて，やがて破風そのものは全く無飾の平板のみが用いられるようになる。かわって，重要な建物では，軒持送装飾が多用される。

総じてこれらの変化は，簡略化，簡素化を明確に指向しており，その方向が逆行することは，ほとんどない。試行，実験の結果が，どちらかというと意匠上の意識の薄い，技術的な観点から反省され判断されたからであろう。また，水平繰形の軒蛇腹や窓ペディメントが棄てられ，持送装飾や，水平笠木に変化していくのは，前者の石造的な細部表現から，より木構造になじんだ形式が選択されていったからだと考えることもできそうである〔V—3〕。

こうした変化は，それなりに自律的であった。明治9年に赴任したアメリカ人教師の影響は，一口で言えば，19世紀後半の合衆国における実用主義的建築観，技法を導入したものであるが，それも，このような自律的志向に合致して初めて，深く決定的になったと考えるべきであろう。開拓使後期の建築にあらわれた実用主義的傾向は，ほぼそのまま，以降の札幌における木造洋風建築の基本的性格に受継がれることになった。

1—3 札幌における洋風建築の展開

開拓使期を過ぎ，明治20年代に入ると，札幌では北海道庁舎（明治21年．重要文化財），札幌製糖会社（同23年）など，大規模な煉瓦造建築が主流を占めるようになる。この期の木造洋風

建築としては，野幌屯田兵中隊本部（明治17年頃），新琴似屯田兵中隊本部（同19年頃）〔著書—1〕，札幌農学校官舎（明治17，18年）[4]，永山武四郎邸（同16年頃）などの遺構が知られている。いずれも比較的簡素な建築であり，外壁下見板はペンキ塗が省略され，軒廻りは全く無飾のままとされている。開口形式は，ほぼ上下げ窓に一定している。これらは，開拓使後期の建築に示された方向に一致している。函館において洋風装飾要素の明治末期，大正期まで保持されるのと，著しい対比を示すものであった。

農学校官舎の開口形式には，一般的な単一の上下げ窓のほかに，上下げ連窓が用いられた。これは以降の木造洋風町屋にしばしばあらわれる新しい手法である。また，連窓では，屯田兵中隊本部の引違連窓が注目された。洋風建築の原形に忠実に従っていた段階から，慣用形式をあわせ用いる，より自在な態度が可能になったものであろう。

農学校官舎は，小屋裏中2階形式の住宅である。既に明治6年および13年の開拓使官舎でも2階妻面に開口が設けられ，小屋裏を何らかの用途に供していたであろうことが推察される。しかし，平面の知られる明治6年の官舎では階段が見あたらないから，物置程度の利用にとどまっていたのであろう。農学校官舎には階段が設けられ，また『北海道大学国有財産沿革』に，木造2階建として2階面積を算入しているから，当初から居住用として小屋裏を計画していたものと考えられる。後，北海道で普及するようになるこの型の住宅の，早い例として注目しておきたい。

小屋裏は，屯田兵中隊本部でも利用されており，そこではバルーン・フレーム様の，カラー・ビーム付梁構造の小屋が組まれている。農学校官舎も同様の構造と見做すことができるが，それらの梁断面は，バルーン・フレーム導入期の農学校模範家畜房，穀物庫（明治10年．重要文化財）の小屋組部材に比して著しく厚くなっている。これも一種の慣用形式への回帰現象と見ることができる。

明治中期の市街地群小建築の状況は，『札幌区実地明細絵図』（明治26年刊）などの絵図資料によって観察することができる。小商店建築のうち，開口形式の判別できるもの47例中，22例が洋風ガラス窓を設けていた。やや遅れて函館の『実地明細絵図』（明治32年刊）では，同じく66例中39例である。函館ほどではないが，着実に洋風建築の浸透していることがうかがえる。もっとも，簡略な木造下見板張の外壁，2階正面に洋風窓を設けただけのものが多く，函館に散見されるような，全体を洋風に整えた例は少ない〔V—5〕。

1—4 函館における洋風建築の展開

安政6年（1859），長崎，横浜と同時に開港された函館には，当然ながら最も早く洋風建築が実現している。文久3年（1863）のハリストス正教会，翌元治元年の英国領事館が，最初期のものとして知られており，現存する渡辺熊四郎別邸のほか，明治初年前後の創建になる洋風建築がいくつか記録されている。

開拓使も，札幌に先駆けて洋風建築を建てている。明治4年（1871）竣工した函館病院の伝承された地絵図，外観写真に見るように，その水準は低いものではなかった。開拓使函館支庁の営繕スタッフについては，ほとんど解明されていないが，札幌本庁とは別に，在函の，洋風建築に習熟した技術者が起用されていたであろうことは想像できる。支庁の営繕スタッフが独自の設計能力を有していたことは，下記のようにはっきりしており，細部に至るまで，請負棟梁にまかせることはなかった。しかもその表現には，いかにも大工棟梁らしい素朴な造作が表われており，支庁内の設計者もまた大工出身の技術者であったことを推測させるのである。

開拓使支庁，およびそれを引継いだ函館県（明治15～19年）の手になる木造建築の遺構としては，函館公園内の博物館2棟が著名である。開拓使博物場（第1館．明治11年），函館県博物

場（第2館．同16年）のいずれにも，設計図，仕様書，請負者の見積書などの関連文書が遺されている。

明治11年の『造営録』[5]には，「博物館新築壱棟御取建仕様書」（同年5月15日付．絵図面5枚添付），「博物館壱棟御新築御入用内訳書」（同年5月17日付．田中善蔵）が綴込まれている。田中善蔵（1832～1891）は，村田専三郎によれば，[6]「明治8年函館裁判所から洋風大建築を請負い……函館招魂社，函館八幡宮等の社殿」を手がけた棟梁である。おそらくこの程度の洋風建築であれば，設計能力をそなえていたであろうが，支庁営繕係の仕様書，設計図の指示は細部まで行届いており，この建物の目立った特徴である，単純な凹曲面の軒蛇腹，玄関柱の彫溝，柱頭彫刻，開口部の詳細などを含めて現遺構によく合致している。

また明治16年の『博物場新築書類』[7]には，「博物館壱棟新築仕様書」（同年6月26日付．絵図5枚添付），「博物館壱棟新築御入用積書」（同年6月28日付．浜谷新助）および，浜谷以下10名の入札書，浜谷の「御請書」があるが，ここでも全く同様に，仕様書，設計図の指示は遺構に一致している。玄関廻りの花飾レリーフ，複雑な繰形の軒蛇腹も，県土木課の設計になるものであった。

ほかに，明治10年代の木造洋風建築遺構としては，函館検疫所隔離病室（明治19年）が知られている。簡素な実用的小建築であるが，玄関妻面には破風飾，唐草風の持送，妻飾板がつけられ，また鎧戸付窓の額縁も細かな繰形を廻すものであった。このような装飾の取扱いは，札幌と異なり，持続的に受継がれていった。

函館においては，明治40年（1907）大火前，20年代および30年代の遺構は，下記の民家2，3例を除いて知られていない。大火直後の明治末期から大正初期にかけての洋風建築には見るべきものが多いが，そこにも，いはば開港以来の建築伝統が流れ続けているように思われる。函館区公会堂（明治43年．重要文化財）の設計者，小西朝次郎（区土木課技師．1879～1924）は，第8師団要塞初期工事で「独学力行」した技術者である。[6]古典主義的な概形の中で，両翼ペディメントの唐草装飾が目をひく。大町相馬合名会社社屋（大正5年）は，均整のとれた古典主義的構成を示す，木造洋風建築の最後の秀作といえよう。その設計者は判然としないが，相馬家出入の棟梁筒井長左衛門（1832～1911）またはその養子与三郎（1862～1926）の手になったと考えられる。

こうした初期洋風建築の流れは，広く群小の民間建築に浸透していて，特に函館ではその力が強かったように思われる。明治40年大火後の復興期に，ほぼ一挙に建設され，かつ大正10年，昭和9年の大火を免れた地域—大町，元町，弥生町，弁天町など[8]—に，ほとんど町並ごと遺存する洋風町屋群には，洋風定着にともなう興味深い様相を観察することができる。

これら洋風町屋の遺例は，昭和45年調査によって138例が採録されており，[9]さらに，昭和52年，うち19棟を選んで，やや詳細な実測調査が行われた〔**V—18**〕。

調査事例中，最も類例が多く，安定した形式は，木造2階建の小店舗，住宅で，1階を在来和風，2階を洋風とするものである。昭和45年調査138例中84例がこの形式によるものであった。このような形式の建物は，函館に限らず，札幌，小樽などでも広く見られる。1階店先は店舗機能上も広い開口が必要であって，在来形式を変えるには至らなかったが，2階は内部和風の居室にかかわらず，外観の意匠志向が優先したのであろう。興味深いことに，同じ形式が商店に限らず，元町藤野社宅（明治41年）や，船見町川畑家住宅（大正11年）のような，専用住宅にも援用されていた。

この形式の小商店の成立は早い。大町電信局（明治7年頃創建．同12年焼失）の函館図書館

所蔵旧写真中，右手街角に，2階に鎧戸付洋風窓を設け，下階を広く開口した商店が見える。『商工函館の魁』（明治18年刊）に収録された131例中，2階建の家屋は51例であるが，2階洋風，下階和風のものは7例しか見あたらない。これに対し，『函館区実地明細絵図』（明治32年刊）では，2階建54例中27例がこの形式に類しており，さらに昭和45年調査事例中明治40年創建とされる48例に限って見れば，31例までがこの形式によっているのである。明治中期から末期にかけて，安定した形式として盛行していったものであることがわかる。

調査例は少ないが，防火造ないし土蔵造町屋の中にも，洋風化の様態を示唆するものが見出された。弁天町杉野商店（明治18年前）は，在来土蔵造の町屋でありながら，2階開口部に洋風手法をとりこんでいる。同太刀川商店（明治34年．重要文化財）や，大町酒谷商店（同39年）は，壁体を煉瓦造としながら添喰仕上として和風土蔵造に見せている。しかも戸袋の隅石塗出，鋳鉄柱，アーチのような洋風手法を混在させている。末広町金森洋物店（明治13年）や，大町遠藤商店（明治15，6年頃）のような，煉瓦造の新様式とは別に，漸進的に新しい手法を受入れていったものである。末広町金森船具店（明治44年）は同じ2階建町屋の基本形を残しながら，ほぼ全面的に洋風に意匠した例である。

細部意匠の特徴や全体的傾向を分析することは，まだ難しいが，従来言われてきたように，上下げ窓と並んで両開窓もほぼ同様に多用されていることは確認できる。軒装飾は持送形式のものが圧倒的に多い。それらの中で，弁天町田中商店（明治34年上棟）の，大ぶりな唐草風持送が注目された。やはり時代が下るにつれて装飾細部の簡略化は進んでいるようである。しかしそれらが目立って頽れてしまうことはない。函館における洋風建築の伝統の持続力を示すものであろう。

1—5 小樽における木骨石造建築

小樽における洋風建築の契機は，札幌における開拓使本庁の建築，函館における開港場建築や開拓使支庁の建築に見てきたような強いものではなかったようである。もちろん，小樽の発展を決定づけたのは，開拓使がここに幌内産出石炭の積出港をひらいたことによるのであり，これに関わって洋風建築が早くから建てられていた。また量徳学校（明治11年）のように，影響力の強い洋風建築も実現していた。また明治中後期には，小樽区役所（明治34年），小樽中央駅（同36年），函館税関小樽支署（同38年）など，木造の洋風公官衙が多数建てられている。しかし，函館の洋風町屋群のような，民間の群小木造建築を広くまきこむ様相は見られない。木造の町屋には，むしろ在来和風の形式が保持されていったように思われるのである。商業都市らしい，一種保守的な自律性を印象づけられるのであるが，それはまた小樽特有の建築形式，木骨石造建築を育む基盤でもあった。

木骨石造建築は『明治工業史・建築篇』[10]に，「石材築造法に就いて甚だ幼穉なりし時代に於いては，頗る危険を感ぜし所なるべし。是れ其の当時に於いて木骨石張附構造の大に流行せし所以なり」とあるように，初期洋風建築のなかで独特の位置を占めるものであった。また，開拓使本庁舎の原設計が，この構造によって企図されたものであることも論考されている。[2]小樽における木骨石造建築を，ごく一般的な意味で，これらと同じ現象のひとつと見做すこともできるであろうが，その発展には少なからぬ独自性も見逃せないのである。

小樽における石造建築の歴史は，明治初年にさかのぼる。明治6年，藤野弥三兵衛が越前から石材を運び，外部を土で塗った石蔵を建て，同じ頃，地元手宮の石材を切出して石蔵を作った者も現れたことが伝えられている〔**V—16**〕[11]。ここでは，洋風の石造建築を擬すためではなく，在来和風土蔵の漆喰外壁を，切石積に替えることから出発しているのである。知られる最も早い

木骨石造建築の遺構は，色内町・小樽運河畔の小樽倉庫の一部（明治23年頃），入舟町角江薬店（同20年代）である。

昭和47年の調査[12]によれば，市内223棟の石造建築遺構が採録されているが，そのうち約半数の110棟は住宅付属の小倉庫，75棟が営業倉庫・商品倉庫，20棟が小商店であった。石造小商店も，在来形式の平入町屋，つまり「店蔵」にほかならないのであるから，この構造形式は，ほとんど専ら倉庫の漆喰外壁代替として援用されたものと考えてよい。

昭和51年，上記概略調査をもとに，代表例15棟を選んで遺構実測調査を行なった〔**V—12 V—15**〕。その結果，営業倉庫，石造小商店では，ほぼ例外なく洋風トラス小屋が用いられていることが確認された。スパンの大きな営業倉庫では当然であろうが，規模の比較的小さな商店建築の洋小屋は注目に値しよう。それは，外観を洋風に意匠した堺町岩永時計店（明治29年），入舟町佐々木銃砲店（同32年）ばかりでなく，和風の勝った，前記角江薬店，色内町早川支店（明治38年），同名取商店（同39年）も同様であり，外観意匠にかかわらぬ，安定した技法として定着していたことを示している。土蔵の単純な代替から出発しながら，明治20年代には洋風建築技術を吸収しつつ発展していったものであろう。

外観意匠は，多くは和風町屋の様式をそのまま踏襲しているが，岩永時計店，佐々木銃砲店のように，ほぼ全体を洋風とするものも散見された。例が少ないから推断は避けるとしても，比較的早い時期に洋風例が見られ，かえって後期のものに整った和風が多いように思われる。岩永，佐々木両商店の建築は，在来平入町屋の基本形式である，2階後退，両端の袖壁を保存しながら，開口部の意匠を中心として，ドーマー窓，バルコニー，ピラスターなどを付加するものである。先に見た函館の金森船具店（明治44年）と共通する意匠手法と考えられよう。

明治末期以降，小樽には佐立七次郎の日本郵船小樽支店（明治39年．重要文化財），辰野金吾，岡田信一郎，長野宇平治の日本銀行小樽支店（明治45年），長野の北海道銀行本店（同）など，著名な建築家による，石造ないし外観石造[13]の本格的な様式主義建築が建てられるようになる。こうした趨勢に刺戟されるように，無名建築家による中規模商業建築が，倉庫，小商店の建築で手慣れた木骨石造を援用しながら建てられ始める。この種のものとしては，堺町百十三銀行小樽支店（明治41年），同小樽新聞社社屋（同42年），色内町清水合名会社（同45年），入舟町上勢商店（大正8年）などをあげることができる。

小樽新聞社社屋は，昭和50年，解体調査された〔**V—10**〕。棟札には棟梁丸藤留治以下の名が記されていたが，設計者の名は見あたらない。『小樽新聞』の自社屋竣工記事〔**V—11**〕にも，屋上飾の紋章意匠を東京美術学校の海野美盛に依頼したことは記されているが，建築の設計者については触れられていない。おそらく棟梁丸藤留治の手による設計と推察されるのである。外壁の木骨軸組は，営業倉庫と違って，筋違を多用しているのであるが，未消化のぎこちなさを見ることができるし，外観の素朴な意匠にも，棟梁建築家の資質をうかがうことができる。

明治中後期には，少数ながら，木骨煉瓦造が行われていた。錦町鈴木家住宅（明治29年），住吉町共成会社（同45年）がその遺例である。石狩湾の対岸，浜益村濃昼の木村源作家倉庫（明治30年前），同群別木村円吉家店舗・倉庫（年代不詳）も，同様の構造であった。両家は小樽を本拠としていたから，同じ系列の遺例としてよいであろう〔**V—7**〕。また時代を下って，昭和初期には，錦町佐藤商店（昭和2年），住吉町小堀商店（同7年）のような，土蔵風の木骨モルタル造の事例が見出された。石積張壁をモルタル壁に代替させたものである。

1—6 日本海沿岸民家の洋風要素

札幌，函館，小樽における洋風建築の展開を概観してきたが，さらにこれらの都会を離れた

郡部における民家レベルの洋風建築の伝播とその様態を測定することが必要であろう。

昭和45年の文化庁民家緊急調査を機として，以降数年にわたり，主として北海道日本海沿岸部の民家遺構を調査した。緊急調査報告〔Ⅵ—1〕に，商家13棟，漁家55棟などを収録したほか，昭和50年には渡島半島東岸の漁家12棟〔Ⅵ—4〕，利尻・礼文両島の漁家9棟〔Ⅵ—5〕を補足調査報告している。これらを通じて，ニシン漁業に関わる特有の民家形式の成立を明らかにしたが〔Ⅵ—7〕，同時に，洋風建築要素を摂取した事例の散在することを確認することができた。

もとより，こうした民家における洋風化は強いものではない。調査遺構71例中，何らかの洋風要素を指摘できるものは，16例，年代別に言えば，明治中期のもの23例中6例，明治後期のもの22例中7例，大正以降11例中3例であった。これらのうち，外観全体を略洋風に整えるものは，寿都町歌棄佐藤家住宅（明治21年頃上棟），浜益村濃昼木村家住宅（同33年），羽幌町焼尻小納家住宅（同）の3棟であり，他は軒廻りや開口部に部分的な洋風要素をとりこんだものであった。

遺構調査を補うものとして，明治中期の絵図刊本資料が有効であろう。『家屋図入北海立志編・福山江差熊石瀬棚地方』（北島社．明治27，29年刊）『同・古宇岩内地方』（同．明治26年刊），『同・枝幸宗谷利尻礼文地方』（同．明治30年刊）および『後志国盛業図録』（同．明治22年刊）から，ほぼ調査地域に対応して，寺社公官衙などを除き，漁家主屋168例を拾うことができる。これらのうち32例の外観に何らかの洋風要素を指摘することができる。『北海立志編』3刊には，建物の創建年が記されているが，これによって見ると，洋風例は，明治10年代で28例中10例，同20年代で32例中15例，特に西後志地方（古宇岩内地方）では，10年代18例中10例，20年代8例中5例を数えることができた。対蹠的に，東後志地方（積丹半島東沿岸）では，47例中に洋風要素を全く見ない。きわだった地域特性として注目しておきたい。

最も早い例は，岩内郡敷島内石橋家住宅（明治13年）である。切妻・平入の典型的な「番屋建築」であるが，平側正面右手，おそらく座敷に面して，竪長のガラス窓を設けている。上記のように，明治10年代の洋風例は全てこの地方のものであった。岩内地方では，幕末・明治初年から鉱山開採が試みられており，これらを契機として，早くから盛んな洋風建築が定着していたのであろう。遺構調査を通じて，近辺に遺存する煉瓦造倉庫が注目されていた。岩内では，明治24年頃，煉瓦製造も始められており，自家製煉瓦を使用した店舗（池田庄次郎）も現れている。

絵図事例中，外観全体を略洋風にするものは，岩内郡野束高野家（明治21年頃），同金子家（同19年頃）の2例のみであった。上記佐藤，木村，小納家住宅遺構は，それぞれ特有の洋風意匠によって目をひくものである。特に，佐藤家住宅は規模の雄大さ，意匠の卓抜さで注目すべき遺例である。従来，明治3年創建が口伝されていたが，同家文書中明治21年の『大福帳』などによって，同年中の上棟，おそくても数年内に竣工したものであることが明らかにされた〔Ⅵ—3〕。大棟中央に，八角の明取窓をのせ，2階に擬上下げ窓をあけている。軒には棰木口をあらわすが，その下に水平繰形の蛇腹をまわしている。同様の例は，月形町樺戸集治監庁舎（明治19年．ただし持送蛇腹）や，道外では山形，福島両県下の郡役所庁舎（明治11年以降）に見られるが，和洋細部を折衷したいかにも自然な手法であった。この簡略化された水平繰形の軒蛇腹は，函館では明治初中期を通じて多用されており，日本海沿岸部でも広く観察された。

佐藤家住宅の2階窓には，外側に両開建具—鎧戸か—がつけられていたようである。開口形式は上下げに見えるが，建具2枚とも窓上へ引上げることができる。この形式は他に見出すことはできなかったが，散見された内片引の竪長ガラス窓などとあわせて，洋風窓をまず外見上のかたちとして素朴に受入れたものであろう。ガラス窓は，民家レベルでの洋風要素としては，最先

にとりいれられた。上記絵図中の石橋家住宅や，遺構例では泊村田中家住宅（明治30年，小樽市移築）のように，もとの文脈からきり離された建築要素として，和風意匠の中に移しかえられたものである〔V—9　VI—6〕。

1—7　結　　び

初期洋風建築は，ヨーロッパ建築の移植が本格化する明治10年代に先行してあらわれた建築洋風化の早い過程であり，主として大工棟梁の素養，資質にたつ建築技術者によって受入れられ，発展させられたものであるが，また広く明治期を通じて，わが国近代建築の底流を形成し，洋風建築の伝播，定着に大きな役割を果たすものであった。そこには，初期洋風建築に特有の性格，一見恣意的な建築要素の解体，移しかえ，伝統手法との混在または習合が観察されるのであるが，それは，外来様式を消化，定着するうえで避けられぬ過程であった。北海道のいくつかの地域を選んで，洋風建築の展開を概観してきた。札幌においては，開拓使後期の建築が指向した，一種の技術主義的な傾向，意匠手法の簡略化が，以降の木造群小建築の性格に及んでいる。これに対し，函館における洋風建築の様式的持続力が注目されよう。小樽の木骨石造建築も，函館の防火造商店のいくつかと共に，手慣れた在来手法に密着しつつ洋風建築をとりこんでいくものであった。洋風建築の地方への伝播には，さまざまの契機が関わって一様ではないが，調べた中で岩内地方を中心とする沿岸民家に，部分的洋風の早くから浸透していたことが注目された。これらの都市や郡部に形成された地方的特性は，それぞれに初期洋風建築の伝播，定着の諸相を典型的に示すものであったのである。

2．大正・昭和前期建築とマックスヒンデル

わが国の近代建築史研究は，従来明治期洋風建築を中心におこなわれてきた。各地の遺構調査，地方研究などの個別研究や，洋風の伝播・定着過程に関する研究など多くの蓄積を通じて，いまだ不充分とはいえ，一定の成果をあげつつある。

しかし，大正・昭和前期建築に関しては，身近であるが故の過小評価の傾向や，現在の中に溶解してしまっている史実，史料の中から，何を抽出すべきか，視座・視点の定まらぬうちに，遺構の破壊，史料の散失が急速に進んでいるのである。その速度は，明治期のものとは比較にならぬほど速い。この期の建築も，意匠だけに限らず，それを作る職人の技術，石材などの材料など，二度とつくることのできない貴重な遺産ともいえるのであるが，札幌市に限っても，札幌独立基督教会・クラーク記念会堂（1922　曽彌中條建築事務所）〔VII—3〕，北海道帝国大学工学部本館（1923　文部大臣官房建築課），第一銀行札幌支店（1928　西村好時），旧帝国生命館（1935　竹中工務店）がすでに失なわれ，日本基督北一条教会（1927　田上義也）の取壊しも決められている。そうした中で，札幌控訴院庁舎（1926）が札幌市資料館として，庁立図書館（同）が，道立三岸好太郎美術館として，新しく機能を得ていることは好ましい方向といえよう。

ともあれ，このままでは，やがて北海道近代建築史を語る上で，大きな欠落を生むことは必至であり，そのためにもこの期の基本的な調査・研究は，早急に必要とされるのである。その意味で，日本建築学会による『大正，昭和初期（1912～1945）建築現存リスト』作成は，この期の建築についての研究の端緒を，あらためて開いたものといえる。

この時代は，〈日本分離派〉の登場から〈日本青年建築家クラブ〉解散に至る，大正期後半から昭和10年頃までの期と，それと相前後する満州事変勃発を契機に，急速に軍事体制へと傾斜していった昭和6年頃から始まり，一連のいわゆる〝帝冠様式建築〟や〈日本工作連盟〉結成などを含む敗戦時までの二つの期に大きく分けられる[14]。

前者は，大正期と昭和期のそれぞれに属する時期に区分されるが，特に前期は，〈日本分離派〉や，類似の運動団体，〈創宇社〉〈ラト—建築会〉〈メテオール建築会〉〈MAVO〉などの結成を契機に，明治期の建築界や建築における〝造家〟という意識が，〝建築〟へと変容していく時期として，単なる時代の変わり目以上の意味を有するといえるのである。

明治30年代後半から，民間に建築事務所の開設されることが多くなったが，その所長，所員や会社営繕などに所属する建築家たちにより新しい組織も誕生する。大正3年，〈全国建築士会〉（大正4年日本建築士会と改称）が結成され，大正6年には，関西の市民社会の中での建築家の職能確立に協力していた〈日本建築家協会〉が大阪に設けられ，建築家のプロフェッション確立への機運が高まっていったのである。大正14年，〈日本建築士会〉創設以来の宿願であった「建築士法案」が，第50回帝国議会に提出された。「建築家のプロフェッションに対するふみ絵ともいうべき事件」（長谷川堯）であったが，戦前にはついに実を結ぶことはなかった。

このような全国的な動きの中で，本道にも遅ればせながら，プロフェッショナルな建築家が，初めて登場した。中央の建築家や設計事務所（ヴォーリス，桜井小太郎，中村鎮，西村好時ら）の仕事にまじって，マックス・ヒンデルや田上義也など，札幌を根拠に活躍した建築家の名を見出すことができるのである。

F．L．ライトの流れを汲む田上義也の来札は大正12年，24才，ヒンデルの来札は大正13年，37才のときであった。ほとんど同時に，アメリカとヨーロッパの近代建築思潮をそれぞれ身に着けた2人が，創成期を共にしたことは，本道近代建築の幕開けとして，いかにもふさわしいものであったといえよう。

マックス・ヒンデル　MAX HINDERは，チューリッヒ生れのスイス人である。当時北海道帝国大学予科ドイツ語教師であった義弟ハンス・コーラー夫妻らのすすめもあって，1924年3月，北海道永住を決心して，アニー夫人とともに，関東大震災後の混乱期に来日した〔Ⅶ—5，Ⅷ—7〕。1887年1月生まれのヒンデルは，16才（1903年）で下級ギムナジウムを終了後，チューリッヒやチロンの設計事務所で製図訓練を4年間受け，建築家への道を歩み始めた。その後の7年間は，チューリッヒ，ロールシャッハ，アーラウ，クール，サン・モリッツ，ミュンヘン，ベルリン，パリ，ブリュッセルなど，当時の近代建築の中心ともいうべき各地の事務所を巡り，修業時代を過ごした。欧州大戦に技術将校として兵役後，1916年チューリッヒで設計事務所を開設，翌年ウィーンで4年間，チロル地方で2年間，設計活動に従事したあとの来日であった。

3年余という短かい札幌市滞在期間にもかかわらず，その作品活動は精力的である。市内では，札幌藤高等女学校（現キノルド記念館　1924），聖フランシスコ修道院（現天使幼稚園　1925），住宅2棟（1925），パラダイスヒュッテ（1926），ヘルヴェチアヒュッテ（1927）などが現存し，そのほか北星女学校寄宿舎（1926），札幌藤高等女学校寄宿舎（1927），住宅5棟をはじめとして，函館湯川天使の聖母トラピスト修道院（現存　1927），新潟カトリック教会（現存　同），日本基督札幌教会案（1927），上智大学基本案（同），ジュネーブ国際連盟館競技設計案（同）などがあげられる。

設計にあたっては，札幌がスイス地方と，比較的気候・風土が類似していたことも幸いしたに違いない。住宅では，こけら張，鉄板張といった防寒用外壁の処理，通風換気の工夫としての床下の開放や切妻面の通風窓，引違窓の採用などの共通した手法がみられる。平面構成では，居間・食堂・台所・ユーティリティの一連らなりの空間処理や，南面するサロン，居間など団らんの場の重視，主婦室や居間における主婦空間の確保，個室群の確立など〔Ⅶ—8〕，西欧近代の住宅思想があますところなく展開されている。居間中心型住宅様式がわが国で成立したのが大正

11，2年頃であり，しかも震災以後中廊下型住宅様式が復興されていったこと[15]や，住宅理論のパイオニアの一人藤井厚二の『日本の住宅』刊行が昭和3年であること，台所の改良，主婦室の要求，子供室の要求，団らんのための居間の確立などの生活改良のための主張など，当時の全国的状況に比べてみても，ごく少数の中流階級住宅とはいえ，本道住宅史上見のがすことのできないものであったといえよう。

パラダイス，ヘルヴェチア両ヒュッテは，本道における本格的な山小屋として，山小屋ブームの先鞭となったものである。前者は，北大スキー部15周年事業として，無償で協力したものであり，日本初のスイス式山小屋ともいわれる[16]が，定かではない。後者は，8坪程度の小品であるが，ヒンデルとグブラー[17]との共同出資により，学生達が手伝い，北大山岳部に寄贈されたもので，在札最後の作品である。「王宮を建てたよりも―ヘルヴェチアヒュッテの建設が自分には深い喜悦であった」[18]と述べるほど，特別な意味をもつ記念作品といえよう。

ロマンティックな雰囲気をもつ藤高等女学校は，彼の作品の中でも，またこの期の建築の中でも傑出したものである。

この期における建築家の職能の未確立，無理解であった状況は前述したが，「建築に関する計画及監督は建築家に一任すべきである。建築問題を解決するは建築家に一任せよ，自ら解決せんとすること勿れ」[19]と，建築家の職能について，新聞を通じて一般の人々への啓蒙に務めたことは，本道建築界において特筆すべきことであろう。また，「何故日本建築のいい所をとり入れて日本独特の建築を造らないか」[20]と，日本建築界におけるインターナショナルスタイルへの傾倒を疑問視していることも，彼の建築観の一端をうかがわせて興味深い。

活発な活動にもかかわらず，1927年横浜市へ移転する。北海道永住の志を何故捨てたかはわからないが，1925年1月のコーラーの死去，コーラー夫亡人のスイス帰国など縁者を失なったことが動機であろうか。移転後は，満坂の事務所を中心に，1940年ドイツへ出発するまでの7年余の間，引き続き活発な設計活動がみられる。札幌の秩父宮殿下ヒュッテ（現存 1928）北星女学校舎（1929），横浜の自邸（現存？1927）Asahi Silk Co.（？），東京　上智大学（現存 1931），聖母病院(現存　同)，名古屋　熱田教会(1928)，南山中学校本館(現存　1932)，岐阜　天主公教会(1928)，天使幼稚園（1930）など，カトリック系の仕事を中心とする作品が多かった。

また，家相や建築儀式といった日本建築の風習などにも興味をもち，ＯＡＧ（Deutsche Gesellschaft für Natur und Völlkerkunde Ostasiens ドイツ東アジア研究協会）における〝Japanische Bausitten〟（日本の建築儀式)と題する講演（1929）などをみても，かなり造詣の深かったことがうかがわれる。

本論では，忘れられた存在であったヒンデルが，札幌における近代建築創成期を代表する建築家の一人であることにふれた。道外における広範な作品活動については，調査中の現段階では，羅列するにとどめざるを得なかった。

同時期のレーモンドやタウト，ヴォーリスら，華々しく活躍した外国人建築家に比較すれば，その影響力は微々たるものであったろうし，作品も秀作が多いわけでもないが，本道においては見のがすことのできない建築家であると同時に，この期の忘れられた地方建築家，外国人建築家を語る上で，無視できない存在ともいえよう。

〔注記〕

1)　村松貞次郎，日本建築技術史―近代建築技術の成り立ち（昭34），地人書館

2)　遠藤明久，開拓使営繕事業の研究（昭36）ほか

3) 木村徳国，越野武，建築学会道支部論文集 24（昭 40） pp.137～140
4) 横山尊雄，越野武，北大北方文化研究 3（昭 43） pp.275～324
5) 北海道所蔵薄書『明治十一年 造営録 開拓使函館支庁 営繕係』
6) 村田専三郎，函館建築工匠小伝（川嶋竜司，はこだての文化財（昭 46）に再録）
7) 北海道所蔵薄書『明治十六年六月 博物場新築書類 函館県土木課』
8) 函館市弁天町の一部は，明治 40 年大火を免れており，30 年代の木造家屋を遺存していることが確認された〔V-18〕
9) 斉藤晴彦ほか，明治末期・大正期における旧函館市街地洋風建築の研究（昭 45）北海道大学卒業論文
10) 工学会編，明治工業史・建築篇（昭 2） p.10
11) 小樽市，小樽文化史（昭 50）
12) 関川修司ほか，昭和初期以前の小樽―その建造物（昭 47）北海学園大学卒業論文
13) 日本銀行支店，北海道銀行本店の建築は煉瓦造，擬石および石張仕上である。
14) 小能林宏城 建築について（昭 47） p.113
15) 太田博太郎 住宅近代史（昭 44）
16) 大野精七談
17) Arnold Gubler（1897.6.25―）1925 より'32 にかけて北海道帝国大学予科ドイツ語教師として在勤，チューリッヒ在。
18) 山崎春雄 山とスキー（昭 3），78，p.25
19) 北海タイムス （大 15）
20) 『雪國に相應しい新しい建築』 北海タイムス （大 15）